



精  
霊  
使  
の  
海

カハテの子。

それが私の呼び名だった。

正確には巫女である。破壊と暗黒の女神カハテを鎮めるために社にいる。

それが私を閉じ込めるためであることも知っている。

神官たちは看守だ。私が逃げ出さないよう見張っている。

この島の人々は恐れている。

かつて島を滅亡の淵へと陥れた暴君を。

その再来——同じ力を持つ者の存在を。

世界が精霊使いだけのものではないことを、私は社へ来てから学んだ。神官たちは私の教育係でもある。

可愛がってくれるわけではないけれど。

仲良くしてくれるわけでもないけれど。

私が巫女になったのは七歳の時だ。家族からは引き離されて、それ以来会っていない。

いや、もしかしたら、年に二回の鎮めの儀式で会っていたかもしれないが、私の方からは気が付かなかったのだ。

鎮めの儀式は二エの儀式。

カハテに捧げられる生贄の鳥の首をはねるのは巫女の役目。私も十歳の頃からそれをやらされている。嫌で嫌で仕方がないのだ、本当は。だからなるべく見ないようにしている。祭壇の二エも、儀式に集まる人も。

神官が色々教えてくれるから、私は自分がどうなるかも知っている。

私の、巫女になって十年の節目に行われる大祭の。

二エは私なのだ。

私自身なのだ。

私は船に乗せられて。

流される。

小舟で、沖へ。戻れない海へ。

カハテの許へ還るために。

私は知っている。今年がその十年目であることを。

私は知っている。大祭が近いことを。

私は知っている。食事に毒が盛られることを。

そして私は、きっとそれらを拒まない。

なぜなら生きるために——私が本当に生きるために、大祭を乗り越えることは必要なことなのだ。

皆が私を呼ぶ。カハテの子、と。畏怖とともに、蔑みとともに。  
昔はそうじゃなかった。ちゃんと名前があったのだ。サーヤ、と。

私はもう一度サーヤになりたい。  
カハテの子ではなく。巫女様でもなく。  
ただのひとりの——女の子に。  
そのために出来ることをずっと考え続けていた。

神官たちは大祭についても色々と説明をしてくれた。  
そこは隠したほうがいいんじゃないかと、お節介にも私自身が心配してしまうくらい。  
その神官たちの話によると、巫女の食事に盛られる毒は、意識が朦朧として体を動かせなくなるというもので、それによって即死するようなことはないそうだ。  
巫女はあくまでも生きたまま、生かされたまま、二工にされる。  
島で一番大きな船で沖へ出てから、巫女だけが小舟に移され流されるのだ。  
その様子は、神官と女官、それに六つの村の代表が見守るという。

女官というのは女神カハテではなく巫女に仕える女の人で、私の身の回りの世話をしてくれている。洗濯や掃除、配膳、繕い物だけでなく、儀式の時には髪を結ってくれたり着替えを手伝ってくれたりする。

けれど彼女たちも、やはり看守だ。  
甘えさせてくれるわけでもなく、親しく話をしてくれるわけでもなく。  
私を、見張っている。  
神官は皆男だから、そういう役目の女の人もしっかり必要なのだろう。  
神官が辞めていくところは見たことがないが、女官はすぐに入れ替わる。  
きっと私と女官とが馴染み過ぎないようにしているのだろう。

不思議なのは女官にも神官にもほとんど精霊使いがいないことだ。  
素質のない人が選ばれてなるのだろうか。  
この島の住人で精霊術を使えない人なんて珍しい。十人に一人か、もっと少ない。

もっともかつての暴君は他者の力を利用して強い精霊術を使ったというから、用心なのかもしれない。

精霊使いではない人を社に置くことで、暴君の再来——つまり私の、力を少しでも削ごうとしているのかも。

暴君の名前は禁忌とされて伝わっていないけれど、どんな力の持ち主だったかは恐ろしげに語られている。

他人の守護精霊を剥ぎ取れたというのは、たぶん言い過ぎだろうけど。  
私が持っている力が暴君のものに限りなく近いことは確からしい。

私には守護精霊がない。これは、普通なら、精霊術を使えないことを意味している。

けれど私は普通じゃなかった。

私は特定の精霊の守護を持たない代わりに、どんな精霊からも力を借りることが出来るのだ。

さすがにその場に存在しない精霊の力を引き出すのは無理だけど。

見えている精霊なら、視界に入りさえすれば、操れる。

それは異常であり——異端である。

だから私は巫女になったのだ。その力のために閉じ込められたのだ。

暴君の再来であり、カハテの子。それが私。

私が異端であることは私のせいではないけれど、他の誰が悪いわけでもなくて、強いて言うなら運が悪かったのだ。

もしかしたら神官たちの中には私に対する哀れみがあるのかもしれない。

あるいは、あなどっているのか。

どうせ何も出来ないと——社から出ることもさえままならないのだからと。

神官は明らかに、私に言わせれば明らかに、話し過ぎた。教え過ぎた。

おかげで私は普通に暮らしていたら身に付けられなかったはずの知識をたくさん得ることが出来た。

今ではそれが私の望みである。

それらの知識が私を生かしてくれるかもしれない、希望である。

神官が教えてくれた、大陸——自分たちが住んでいる場所の他は小さな無人島しか知らないこの島の人には想像もつかないような広大な陸地だという、その場所。

海の彼方にあるというその大陸にたどりつくことが出来れば。

私はそこで生きていくことが出来るかもしれないのだ。

私が海に出るには、島を出るには、大祭を待つしかない。

自分自身が二工にされるという危険極まりない儀式だけれど、乗り越えることが出来れば可能性がある。

逆に言えば。

大祭を嫌がって逃げ出した時には、もはや希望などなくなる。私を待っているものは二工の祭壇であり確実な死だ。

鎮めの儀式の鳥のように、私は首をはねられるだろう。

私にはそんな運命は受け入れられない。

カハテの子と呼ばれても。女神に仕えていても。巫女であっても。

私は女神のためになら命を差し出していいと思うほど、信仰に熱心ではないのだ。

私が巫女となったのは他の道がなかったから。  
私が社にいるのは閉じ込められているから。  
私は女神を恨みはしても、決して慕ってなどいない。

私がまだ幼かった頃、ニエの鳥が可哀そうだと泣いたことがあった。  
暗き女神は、巫女の哀れみとともにニエを受け取るのだと、神官たちに教えられた。  
その時の彼らは何故か満足そうだった。全て上手くいっているというように。

もしかしたらと、最近思うのだ。  
鎮めの儀式は女神のためのものではないのかもしれない。  
儀式で鎮められているのは暴君の再来——私なのかもしれない。  
私に弱者への哀れみを、流血への嫌悪を、植え付けるために。  
私が真に暴君になることがないように育てるための、儀式。  
もちろん、考えすぎかもしれないけれど。

回廊の鈴がチリチリと鳴った。女官が巫女の部屋へ来る時の先触れだ。  
神官は鈴など鳴らさない。いつも突然やってくる。  
その点では神官よりも女官の方が好ましい、なんてことを考えながら私は姿勢を正した。  
あまりだらしなくしていると、あとで神官に叱られてしまう。  
少し経って扉の向こうから若い女官の声がした。  
「カハテの子、入室をお許してください」

いつも通りのその呼びかけに、神官たちに教え込まれた巫女の発声で私は答える。  
「許します」  
と、ただ一言。  
他の答えはない。選択肢がないのだ。どんな時でもそう答えるようにと言われていて。  
神官の言いつけに従うことを不満に思わないわけではないけど。  
少しでも居心地よく過ごそうと思うのなら、言われたとおりに振舞うのが一番だと私は学習していた。

「失礼いたします」  
どこか不安げな、怯えたような顔の女官が入ってきた。  
私が知っている女官の多くは、無表情か怯えているかのどちらかなので、特に気にはならない。  
きっと彼女たちも神官から色々言われているのだろう。  
たとえば、巫女の前で笑わないように——とか。

あまり見たことのない女官だった。

もっとも、入れ替わりが激しい彼女たちの顔や名前を覚えることを、私はすでに放棄しているのだが。

社に全部で何人の女官がいるのかすら、私にはよくわかっていない。

部屋に入ってきた女官がおずおずと言う。

「夕餉の準備が出来ております」

私はどきりとした。今年に入ってから食事のたびに不安になる。

まだ——だと思うのだけど。

私が何の返事もしないので、女官は戸惑ったようだった。

「お召し上がりになりますか？ それとも、どこかお体の具合が」

「いいえ、大丈夫」

騒ぐ心を静めながら、遮るように言った。

「お食事はいただきます。体に不調はありません」

具合が悪いと言ったら神官が呼ばれるだろう。

神官の中には数人の精霊使いがいて、私の医者代わりになっている。

彼らが来るのは困る。

巫女の食事中は女官が見張りのように付き添うが、今はひとりになりたいくらいなのだ。

若い女官が外へ合図をすると、食膳が運ばれてきた。

平常心、平常心。私は自分にそう言い聞かせる。

いつか毒を盛られるとわかってはいるけれど。

それを知っているからといって取り乱してはいけない。

従順な巫女だと。

おとなしいだけの扱いやすい娘だと。

神官にも女官にも、そう思わせておかなくては。

運ばれてきた食事にいつも通り白湯が添えられていることにほっとする。

温められただけの水は、そこに宿る精霊も素直でわかりやすい。

傍らに控えている女官に不信感を持たせないよう注意しつつ、私は湯飲みを覗き込んだ。

視線だけで精霊を操るのも、暴君の再来の力。

水は清らかであることを好むものだから、こういう時にはわかりやすくて助かる。

言葉は要らない。私はただ水の精霊の様子を見た。

大丈夫、何かに汚染されている気配はない。

胸中でそっと安堵の息をつく。

もちろん、他の料理に毒が入っている可能性がないわけじゃない。

しかし私が何を食べて何を残すかわからない以上、全てに毒が盛られるのではないかと思うのだ。



調理された肉や野菜は、元の精霊をまもっていない。

変質してしまうのだろう。

私は自分で料理をすることを許されていないので、よくわからないけれど。

動物が死ぬと精霊が離れていくことは知っている。

鎮めの儀式で何度も見てきた。

植物は折られた枝にも精霊がいるけれど、煮たり焼いたりするとやはり死んでしまうのだろう。

とにかく過熱された料理から精霊の状態を探るのは難しい。

だから私は毒入りかどうかを白湯で確認することになっている。

ひとまず、この食事は問題ないと判断し、私はさじを取った。

主食はいつも粥で、今日はそれに汁物と炒め物、漬物の小鉢が添えられていた。

汁物は細かな肉と青菜と香味野菜が入っている。

私は肉が好きではない。

ニエの鳥を思い出すからだろうか。

私は結局、汁物にはほとんど手をつけなかった。

夕食が終わると湯浴み。

ゆったりと体を温めながら、どこにも異常がないかを確認した。

毒がすぐには効かないかもしれないから、食後もしばらく落ち着かない。

毎日湯を使うことが出来るのはこの島では贅沢なことで、巫女の特権である。

義務でもあるのだが。

湯浴みの後に女神カハテへの祈りを捧げるため、身を清める意味があるのだ。

女官たちに髪を拭かれ、巫女の服を着せられて祭壇のある部屋へ。

鎮めの儀式の時のニエの祭壇とは別の、毎日の祈りのための簡素な祭壇だ。

その祈りの間には、私の仕事を見張るように、毎晩神官が待っている。

神官は無表情のまま私を祭壇へと導く。

「カハテの子。女神に祈りを」

強制するわけでもなく、ただ淡々と促すだけの声。

私はうなずいて一步前へ出た。

祈りの言葉は何度も教えられたから、しっかり覚えている。

確かに私は信仰に熱心ではないけれど。

それでも神が存在しないと思ったことはなかった。

祭壇の前。一礼して御神酒を供え、意識して巫女の声を出す。

「カハテよ、無慈悲な女神よ。今はその破壊の手を休めたまえ」

背後で神官たちが頭を下げる気配を感じた。

振り返らずに私は続ける。

「暗き女神よ。我らの夜に安らぎの闇を与えたまえ。苦しみと痛みを壊し、死せる我らが同胞に憩う場を与えたまえ。来るべき再生の時まで御身のそばに仕えることを許したまえ。神酒を受け取りたまえ、菜を受け取りたまえ、我らしもべの非力を許したまえ」

許したまえ、と神官と女官が復唱した。

祭壇のわきに用意されていた小鉢と箸を御神酒の隣に供える。再び一礼して、私は後ずさった

。

裾を踏まないように退くのも、もう慣れた。

女官が祈りを終えた私に対して頭を下げる。

そこに敬意があるかなど知ったことではない。

彼女たちはそうするようには言われているだけなのだから。

神官はあくまでも巫女と同等かそれ以上ということなのか。女神には礼をしても私には何も

ない。  
もっとも、ここで礼などされたら気色悪くて仕方がないだろうとは思う。

私が祈りの間から出ると女官が後をついてくる。

巫女の服から寝巻きに替えるのを手伝うためだ。

正直うっとうしい。

着替えくらい一人でできると思うのだが、させてくれない。

逆らったところで無意味なのはわかっているから、手伝ってもらうのだけど。

おとなしくしているに限る。

特に大祭を生き延びるすべを考えている今は。

私が布団に入るまで女官はそばで見張っていて、朝になると起こしに来る。

起こしに来るといふか、鈴の音で目が覚める。

そういうものなのだ、いつもなら。

その日の朝は女官ではなくて神官が起こしに来たから驚いた。

神官だけが来たというわけではない。

髪を整えるとか、着替えるとか、朝の身支度があるからか、女官も近くに控えている。

窓から外の様子を見れば、どうやらいつもより早い時間に起こされたらしいとわかる。

「何事です？」

半分寝ぼけたまま私が訊くと、無表情の女官が寄ってきて、だらしなく乱れた寝巻を整えてくれた。

しかし神官には私の身支度を待つつもりなどないらしい。

寝台に座ったままの私を見下ろして厳かに告げた。

「カハテの子にはこれから潔斎の宮へ移ってもらう」

「潔斎の宮？」

そんな場所があったらどうか。聞いた覚えもないような。

社の外という可能性もあるけれど、今この時期に私を外に出してくれるとは思えない。

「西の離れだ。これから三日間、そこで身を清めよ」

神官に言われて、私は離れなら知らなくても仕方がないかと思った。

私はこの社に十年住んでいることになるが、未だに知らない部分の方が多い。

しかし、身を清めるとはどういうことか。

巫女である私の暮らしは常に身を清めているようなものなのに――

寝起きの私が状況を理解できていないと判断したのだろう。

神官はいくらか呆れたような顔つきになった。

仕方がないというように嘆息し、合図をする。

それに応じて女官のひとりが水を張ったたらいを持ってきた。

いつもの身支度のひとつだ。

袖や髪が濡れないよう、女官に手を貸されながら、冷水で顔を洗う。

拭くための布を受け取った時にはさすがに頭もすっきりとしていた。

「さて、ようやくお目覚めかな。話をしてもよろしいか？」

神官の皮肉に、だらしのない姿を晒したことを意識し、顔が赤くなるのを感じた。

その顔を見られたくなくて、横を向いて返事をする。

「西の離れに移るのでしょうか？ ずいぶんと急なお話ですね」

「大祭の日取りが決まった」

「え、」

淡々とした声に、一瞬意味がわからなくて。

私は隣に立つ神官をまじまじと見つめた。

あまりにも驚いてしまって、私はぽかんと口を開けていた。

神官ののがめるような視線に、慌てて表情を引き締める。

けれど。

まさかこんな。

急なことではある、でも、あらかじめ告知されるだなんて。

私は何も知らされないのだろうと、そう思っていたのに。

だって私は二エなのだから。

抵抗を抑えるためにも、大祭の準備というのはもっと突然起こるのだろうと。

そう考えてきたのに。

いや。思い返してみれば。

神官たちは今まで私に何かを隠すということがあまりなかった。

社について私が多くを知らないのは、知ろうとしなかったからで。

知っても意味がないと思っていただけで。

潔斎の宮という場所も、他の離れについても、訊けば答えてくれたのだろう。

そして今までのように。

大祭についても隠そうとはしていないのだ。

ならば、訊けば教えてくれるだろうか。

食事にいつ、毒が盛られるのか、とか。

私はどうやって社から運び出されるのか、とか。

二エの巫女の小舟とはどんなものか、とか。

それらのことも神官たちはきっと隠さない、そんな気がして。

私はなんだか、すっかり、脱力してしまった。

拍子抜けした、というのが正しいのかもしれない。

まったく、食事のたびに警戒していた日々はなんだったのかと。

呆気にとられたまま、潔斎の宮とやらに移る用意をした。

もっとも私はただされるがままになっていただけで、実際の用意をしたのは女官たちだ。

私の長い髪は丹念にとかされて、足の爪まで磨かれる。

裾も袖も長い、贅沢に布を使った白い服を着せられて、えんじ色の帯を締めた。

その帯も長かった。複雑に結んであるのに、立った状態で膝まで垂れている。

鏡などの身の回りの品は、このまま巫女の部屋に残していくらしい。

次の利用者のことをちらりと考えて、すぐに頭から消した。

私はこの島を出て行くのだから、考えても仕方がない。

何より。

カハテの巫女は十年目で二エとなる。

私の次の巫女もきっとそうなるのだ。

それを思うと、他の巫女の存在というのは、想像して楽しいものではなかった。

社には力仕事を請け負う下男のようなものはいない。

だから今回も大きな荷物は運べないし運ばない。

私は女官を引き連れて、長い裾を引きずりながら、潔斎の宮まで移動した。

離れとはいっても回廊でつながっているため、地面は歩かずにすむ。

その分、通路は遠回りで、思いのほか長く歩くことになった。

案内された潔斎の宮は、巫女の部屋がある本殿からだと、確かに西の方にあった。

そして——黒かった。

壁も黒く、屋根も黒く、とにかく真っ黒な建物。

外観だけではない。入ってみれば内側の壁も黒一色に塗られている。

部屋の一角に設けられた祭壇の上の酒器だけが、浮かび上がるように白い。

外からは見えなかった部分にも、窓や扉はない。

部屋がひとつ、入り口もひとつ。それがこの離れのすべてだった。

部屋の数箇所でもりのために火がともされていた。

とはいえ、その明りは十分だとは思えない。

入り口の扉を閉めてしまえば部屋の中は薄暗いだろう。

カハテは闇の女神だから、この暗い部屋は女神のためなのかもしれない。

手に燭台を持った神官がやってきて、私の考えを見透かしたかのように言う。

「ここは女神と向き合うための場所。大祭の前の巫女はここで数日を過ごす慣わしだ」

確か、三日間、と言っていたか。

入り口が開いていても外よりはずいぶん暗い宮の中で、灯火に照らされた神官の顔が浮かび上がっている。

その表情から何を考えているかは読み取れない。

「寝台も何もありませんね」

ふと思ったことを口にしてみた。

数日過ごすと言うのは、夜もここに居ろということだと思うのだが、まさか寝るなというわけでもないだろう。

黒くて暗く、広い部屋だ。家具も仕切りもない。

短い期間とは言え、人が住むようにできているとは感じられなかった。

神官の顔がわずかに緩んだように見えた。

それはまるで微笑を隠そうとして失敗した、というふうだったけれど、気のせいだったかもしれない。

にっこり微笑む神官なんて、私がここに来たばかりの子供の頃にしか見たことがない。

今思えばそれも、ただ機嫌をとろうとしただけで、子供をかわいがっていたわけではないのだろう。

「心配せずとも、夜は女官たちに布団を運ばせよう」

「床に直接敷いた布団で寝ろというのですか？」

そう尋ねてしまってから軽く後悔した。

訊くまでもないことだったし、聞いても仕方のないことだった。



何より大祭という一大事を前に、床で寝ることを気にするのもおかしな話だ。  
ただ、私には、ここに来る前の記憶がおぼろにしか残っていない。  
巫女の寝台以外の場所で眠った時のことなど、もう思い出せないのだ。

「寝具は夜運び入れ、朝には宮の外に出す。決まりなのだ、カハテの子よ」  
私はただうなずいた。

「夜の祈りは今までの祭壇ではなく、そこで行ってもらおう」

神官が示したのは黒い部屋の中の白い酒器が捧げられた一角だった。

「我ら神官も女官も立ち会わぬ。巫女と女神が向き合う場所だからな。時間も今までとは違う。  
夕餉の前だ。当然、湯浴みの時間も違って来る。女官を迎えに寄越すから、それでわかるだろう」

「はい」

私は殊勝に受け入れた。素直な、おとなしい娘に見えるようにと思いつつながら。

大祭を前にしても落ち着いていると。

己がニエになることを知っていても怯えてなどいないと。

何より逃げ出そうなどとは考えてもいないのだと。

神官にも女官たちにも、そう感じてもらえたらいい。

それを信じてもらえたらいい。

いや——そうしなくてはいけないのだ。

<続く>